

金沢港周辺地域の活性化策

～「交流」、「伝統文化」、「アジア」をキーワードとした開発のコンセプト～



平成13年3月

日本政策投資銀行北陸支店

要旨

金沢港及びその周辺地域は、現在は物流面・都市機能面ともに十分な役割を果たしているとは言いがたい。そうした中、当地域は平成 15 年の県庁移転に併せて整備が進められている西部副都心の一翼を担う重要な地域であり、その機能を見直す時期は今を措いてないものと思われる。

1. 「海の窓口」金沢港の物流港としての成立の可能性

金沢港における取扱国際貨物量及び輸出入額は、北陸 4 県の国際港湾 5 港の中で第 3 位に位置している。

しかしながら、日本海側港湾全体の輸出入額の合計は、全国比の 2% に満たないのが現状である。これは、後背地にさほど大きな工業集積又は人口集積を有さない日本海側地域では、それに伴う貨物量の不足からコスト高、航路・便数不足等、利便性が低く、従って、太平洋側大港湾が多用されるといった、悪循環に陥っている為である。

こういった現状から、当地域の開発計画における金沢港の位置づけとして、物流専用港としての成立は困難と言わざるをえず、金沢港及びその周辺地域の活性化には当地域が有する潜在的な魅力について、もう一步踏み込んで考える必要がある。

2. 観光都市としての金沢の魅力

周知の通り、金沢は九谷焼、加賀友禅等に代表される、優れた伝統工芸品等の美術工芸技術や、太平洋戦争で戦災から免れた城下町の街並みを今なお有する、北陸地方で最も豊かな観光資源を有する都市である。

さらに、日本海を挟んで 1000 年以上も前から朝鮮半島との交流があり、強く朝鮮文化の影響を受け、古代の日本にあって北九州と並んで最も国際的な土地であった。太平洋戦争を挟んで、韓国にとっての暗い歴史をたどり、韓国は長年に渡って日本にとって最も遠い外国の一つであった。しかしながら、90 年代に入り投資促進の交渉開始等による経済関係の強化、日本の映画・漫画雑誌の解禁など、2 国間の関係改善は急速に進行している。

そこで、現在の金沢が、最も近い外国である韓国を始めとする、日本海対岸諸国からの観光客を誘致し、さらに 21 世紀へ向けて金沢の美術工芸を新産業として再生する事で新たな都市の活性化への足がかりに成ることを狙いに以下の提案を行うものである。

金沢港を観光・物流併用型港湾として位置づけ、比較的安定した貨物量を有し、国際コンテナ定期航路を有する釜山との間で、貨物と観光客を同時に移送できるフェリーの就航が望ましい。

現在、小松空港とソウル間で日本航空が週 2 便の定期便を運行している。フェリーによ

る釜山ー金沢航路の開設により、航空便より安価に、そして韓国南部からでも容易なアクセスが可能となる事は観光客誘致活動に大きなメリットとなると考えられる。

さらに、海外への観光では、数日から1週間程度の短期間に複数都市を訪れる場合が多く、韓国からの観光客が、例えば空路で羽田空港から入国し東京観光をした後、金沢港からフェリーで帰国するなど、金沢へ誘致するインセンティブにも成りうるのである。

3. 金沢西部新副都心開発へ向けた6つの提案

「2. 観光都市としての金沢の魅力」では、主に韓国を対象とした国際観光の振興について検討したが、本項では、観光に留まらず、東アジア諸国との交流の窓口としての新しい街「金沢」といった観点から、具体的にどのような機能が必要なのかについて、①金沢港旅客ターミナル、②商業施設、③伝統工芸産業の再生と次世代を担う人材の育成、④居住を前提としたコミュニティの形成、⑤東アジア諸国との文化・語学交流機関、⑥コンベンション施設等、について検討する。

都市機能の観点からは、これまで用途地域区分により、居住地区、商業地区といった機能別に区分され、それらの集合体が都市としての形態をつくってきた。

しかしながら、情報革命が進む中、21世紀へむけた街づくりは、こうした壁が取り払われ、ネットワーク化された情報システムの枠の中で、異なる機能が融合しながら成立する新たな都市の形態に移行しつつある。

本編では、金沢西部副都心を一つのコミュニティと捉え、IT化による域内情報ネットワークを構築すると共に、金沢の特長を活かした都市機能を盛り込み、情報だけでなく人と人の「交流」を創出する事を目的として、各施設立地の提案を行っている。

①金沢港旅客ターミナルと

・ 金沢港旅客ターミナル「情報センター・ターミナル」

周辺観光地間とのオンライン情報提供情報センター機能を有する旅客ターミナルビルの整備

・ 自然公園

周辺の水辺の空間においては、街の喧噪とは対照的な緑豊かな景観を残す「自然の中の港」を演出する空間を整備

②商業施設

・ マーケット・プレイス

製造工程が見学・体験できる工房一体型の低価格伝統工芸品ショップ
韓国の最新ファッションを取り入れたアパレル関連製品の輸入販売等

・ オークション会場

高価な伝統工芸品のオークションで販売（見学ツアーや商品展示等のショー的演出）

・ フード・コート

日本的なものばかりでなく東アジア、東南アジア料理等を提供するフード・コート

③伝統工芸産業の再生と次世代を担う人材の育成

- ・ 伝統工芸品のデジタル・アーカイブス化

伝統的なデザインを日常的で身近な製品として再生し新たな地元ブランドとして確立

↓

開発商品の商品化権の売買、ロイヤリティビジネスへの展開等

- ・ 伝統工芸職人大学

伝統工芸産業振興の拠点（県内の既存の大学群との連携プログラムの実施等）

④居住を前提としたコミュニティーの形成

- ・ 工房一体型住宅、SOHOタイプのプラグ・イン住宅

職人、デザイナー、プログラマー、学者、学生等が創作活動・研究活動を通じて、オンライン、オフラインの「交流」をする場

↓

都市のインキュベーター機能

⑤東アジア諸国との文化・語学交流機関

- ・ 東アジア文化カレッジ

東アジア交流の担い手の育成、東アジア諸国との共同研究、県内の大学等のサテライト・オフィス機能

⑥コンベンション施設

- ・ 国際交流センター

コンベンションや国際会議、展示会、スポーツ・イベント等が開催可能な多目的施設

目 次

金沢港周辺地域の活性化策

～「交流」、「伝統文化」、「アジア」をキーワードとした開発のコンセプト～

要旨	1
目次	5
はじめに	9
第一章 金沢への「窓口」金沢港と小松空港の現況と展望	11
1. 「海の窓口」金沢港の物流港湾としての現況は曇りがちか	11
(1) 北陸における物流港湾の現況	11
(2) 金沢港の沿革と概況	14
1) 沿革と施設概況	14
2) 国際コンテナ物流の現況	15
3) 客船の就航と親水空間の整備状況	19
4) 長期的に見た物流港としての可能性	20
2. 「空の窓口」地方国際空港としての小松空港の展望	21
(1) 地方空港の国際化（グローカライゼーション）における問題点	21
(2) 航空貨物の現況と展望	21
(3) 旅客定期便及びチャーター便の現況	22

第二章 観光都市金沢と金沢観光構想 24

1. 比重高まる観光用としての港の利用 24

(1) 金沢の観光都市としての位置づけ 24

(2) 低迷する宿泊産業の現況 25

参考資料：「日本海インターナショナルについての考察」 26

(3) 主に韓国をターゲットとした観光客誘致 28

(4) 人とモノの同時移送のメリット 29

(5) 「小松空港－ソウル」航空路と「金沢港－釜山」フェリー航路の棲み分け . . . 32

(6) 活発化する日韓関係強化の動向 33

(7) 北陸4県と海外都市の姉妹都市提携の状況 34

2. 観光客誘致の手法 35

(1) ツーリスト得々パック・カード－ウィーン・カードの例－ 35

(2) リアルタイム・オリエンテーション－ヒューマンナビゲーションシステムの例－ 35

第三章 「交流」, 「伝統文化」, 「アジア」をキーワードとした活性化の姿 . 37

1. 「東アジア」へのゲートウェー 金沢港 41

2. インターナショナルなアジアの空気漂う市場 42

(1) 遊べる体験型マーケット・プレースの提案

－低廉な伝統工芸品とアジアン・ブランド－ 43

(2) 参加型オークション会場の設置

－オークション見学ツアーと出品作品の展示による集客－ 44

参考資料：「ドロテウム」－オーストリア－ 45

3. とりわけ注目される伝統文化産業 47

(1) 進むデジタル化と新しい可能性 47

(2) 次の時代を担う人々をどう育成するか

－職人育成機関の提案－ 49

4. 居住機能が融合したクリエイターの街の形成

－インキュベーション都市としての国際・工芸居住区－ 52

参考資料：「シリコンアレー」 53

5. 東アジア諸国との教育・文化・研究交流の場の創造	
－対東アジア交流の担い手を育成する「東アジア文化カレッジ」の発想－	55
参考資料：立命館アジア太平洋大学	56
早稲田大学大学院アジア太平洋研究科	58
東洋文庫	60
ユネスコ東アジア文化研究センター	61
6. 国内外のコンベンションを通じた交流・情報発信拠点の設置の可能性	
－国際交流センター誘致の提案－	62
(1) 金沢におけるコンベンション誘致戦略の経緯	63
(2) 新たなコンベンション施設整備の必要性	64
7. 結びに	66
参考文献	69